水仙の幻想

薄田泣菫

青空文庫

すべての草木が冬枯れはてた後園の片隅に、水仙が五つ六つ花をつけてゐる。

そのあるものは、肥り肉の球根がむっちりとした白い肌もあらはに、寒々と乾いた土の上に寝転んだまま、牙彫りの彫物のやうな円みと厚ぼったさとをもつて、曲りなりに高々と花茎と葉とを持ち上げてゐる。

白みを帯びた緑の、女の指のやうにしなやかに躍つてゐる葉のむらがりと、爪さきで軽く弾いたら、冴え切つた金属性の響でも立てさうな、金と銀との花の盞。

その葉の面に、盞の底に、寒さに顫へる真冬の日かげと粉雪のかすかな溜息とが、溜つては消え、溜つては消えしてゐる。

水仙は低く息づいてゐる。金と銀との花の盞から静かにこぼれ落ちる金と銀との花の芬香は、大気の動きにつれて、音もなくあたりに浸み透り、また揺曳する。ぼろぼろに乾いたそこらの土は、土塊は、その香気のために絶えず焚き籠められ、いぶし浄められている。水仙は多くの美しい生命をもつものと同じやうに、荒つぽい、かたくなな土の中から生れいでながら、その母なる土を浄めないではおかないのだ。

すべての香気は、人の心に思慕と幻想とを孕ませる。私は水仙の冷え冷えとした高い芬香に、行ひ澄ました若い尼僧の清らかな生涯を感じる。

蝋石のやうにつめたく、滑らかな肌をしたこの後園の尼僧は、生れつき環境の騒々しさを好まないところから、わざとすべての草木は枯れ落ち、太陽の光さへも涙ぐむこの頃の時季を選び、孤寒と静寂との草庵のなかに、独自の生涯を営み始める。ひとりぼっちといふものは、自分の生活をもつてゐる者にとつては、必ずしも悪い境遇ではない。草木の多くは太陽に酔ひ、また碧空に酔ふが、時季が時季のこととて、今は太陽の盞も水つぽっくなり、大空の藍碧も煤けきつてゐる。清浄身の持主であるこの尼僧は、そんなものには見向きもしないで、その眼はひたすら純白な自らの姿を見つめ、そしてわれとわが清浄心のむせるやうな芬香に酔つゐる。この清浄心の芬香こそは、持前の大きな球根の髄から盛り上げてくる水仙の生命そのものなのである。

どうかすると粉雪のちらつかうとする頃だけに、恋の媒介者である小蜂など、気まぐれにもここに訪れてこようとはしない。むかし、孟蜀にすぐれた術士があつた。この男は、画の道にかけてもかなり評判が高かつたので、ある時領主が召し出し、御殿の前庭の東隅で一つがひの野鵲の画を描かせたことがあつた。すると、どこからともなく色々の小鳥がその近くへ飛んできて、べちやくちやと口喧しく騒ぎ立てた。それに驚いた領主は、さらにまたその頃花鳥画家として声名の高かつた黄筌を召し出し、庭の西隅で同じやうに一つがひの野鵲を描かせたが、今度は別に何の不思議も起こらなかつた。領主はその理由を筌に訊ねた。

「おそれながら私の画は藝でございますが、あの男のは術の力でできあがってをりますので……」

かういつて答へた黄筌の面には、そんな小供騙しのから騒ぎなどには頓着しない、真の藝術家にのみ見られる物静かな誇りがかがやいてゐたといふことだが、私は今水仙の純白な花びらに、小蜂の騒音などを少しも悦ばない、高い超越と潔癖とを見ることができる。

それだからといふではないが、水仙の子房は一粒の実をも結ばない。ちやうど尼僧が子を孕(はら)まないのと同じやうに……

青空文庫情報

底本：「泣菫随筆」冨山房百科文庫、冨山房
　　1993（平成5）年4月24日第1刷発行
底本の親本：「樹下石上」創元社
　　1931（昭和6）年
入力：本山智子
校正：林　幸雄
2001年7月6日公開
2006年1月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水仙の幻想

薄田泣菫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/